
 書 評

スポーツ傷害のリハビリテーション

—Science and Practice—

山下敏彦・武藤芳照 編集

1964年に開催された東京オリンピックは本邦のスポーツ普及・発展に多大な貢献を果たしました。選手強化対策本部の設置、スポーツ医科学の導入、各種スポーツの日本リーグ設立など、トップ選手には競技により専念できる環境が提供される先駆けとなりました。更に日々の熱戦はスポーツの感動とともに全国津々浦々にまで放映され、一般市民にまでスポーツの裾野は一気に拡大しました。あれから半世紀が過ぎ本邦のスポーツ文化は成熟期を迎えていますが、2020年に開催される2度目の東京オリンピックが、どのような変化をもたらすか大変興味深いところです。

このような時期に発刊された本書は、2008年の初版出版から9年の時を経て改訂された第2版です。その間に生じたスポーツを取り巻くあらゆる環境の変化が、スポーツ傷害の質・量に大きな影響を与え、今やスポーツ傷害の克服は以前にも増して注目されるテーマとなりました。

表紙を見てまず目に留まるのは、書名の2nd lineに記された“Science and Practice”の文字です。これは初版から引き継がれたもので、本書の最大の特徴を示すキーワードとなっています。編者である山下敏彦先生、武藤芳照先生が書かれた初版の「序」では、医師とリハビリテーションスタッフ間のコミュニケーション不足、経験的・慣習的に行われているリハビリテーション手技の存在を当時の問題点として指摘しています。それに対して科学的理論や根拠に基づいたリハビリテーションの重要性を強調し、本文もそれを具現化した構成となっています。第2版でもそのスピリッツは受け継がれ、総論となる第I章から第III章では、アスレティックリハビリテーションに必要な運動生理学、生体力学、トレーニング理論が解説されています。第IV章以降の各論ではまず整形外科医により病態・治療の概要が述べられ、次いで理学療法士がリハビリテーションの実際を解説する形式が踏襲され、「科学(science)を理解した上で実践(practice)へ」というスタイルが徹底されています。

本書の肝となる「リハビリテーションの実際」でも理解を深めるための工夫が随所に見られ、幅広い読者層への配慮が伺えます。受傷後(手術後)の各病期におけるリハビリテーションの目的や進め方が一目でわかるよう、冒頭に設けられた“NOTE”ではその概要が記載されています。全体的なイメージを持った上で手技の詳細に触れることができるため、臨床経験の浅い読者でも短時間で読み進めることが可能です。随所に掲載されたリハビリテーション場面の写真は、手技の正しい理解を視覚的に助け、陥りやすい誤用や不良肢位の防止に極めて有効です。各疾患の末尾に添えられた「リハのポイントとコツ」は、臨床経験豊富な執筆陣が語る「先輩から後輩へのアドバイス」として大変参考になります。

第2版となる本書では、「アスレティックリハビリテーションのリスク管理と事故予防」が総論に、「股関節・鼠径部のスポーツ傷害」が各論に追加されています。それぞれ昨今の医療安全に対する意識の高まり、サッカー人気を反映した傷害発生数の増加に応えるかたちとなっており、極めてタイムリーな追加項目といえます。

スポーツ傷害の治療における最終ゴールの一つが、発症・受傷前のパフォーマンスレベルでスポーツ復帰を果たすことです。そのためにはゴールまでの具体的な道筋を整形外科医とリハビリテーションスタッフで共有することが不可欠です。両者の共通認識の橋渡し役として本書の活用価値は高く、同一施設で勤務する整形外科医とリハビリテーションスタッフには是非とも一緒に一読いただきたい一冊です。

津田英一(弘前大学リハビリテーション医学)

[金原出版, 本体7,400円]

